

幼児期における保育者の役割

—保育内容「健康」の実践—

非常勤講師 田中達也

はじめに

現在、子どもを取り巻く環境は悪化をたどっている。遊び場の不足、ジャンク・フードの多用に代表される栄養バランスの欠如、さらに親子間、友達間などの人間関係の希薄さが子どもの精神的・身体的発達を阻害している。これらの状況を打破するには、家庭や社会の適切な対応が必要とされる。特に、幼稚園・保育所における保育者の役割は、今ほど強く認識される時はない。幼児教育の草分けといわれている倉橋惣三は、『幼稚園保育法真諦』の中で、「教育はどの教育であっても、相手の生活を尊重しなくてはならぬ」のであり、「教育の生活化とかあるいは生活主義教育」が求められるとする。彼は、「幼児教育の場合において、教育の生活化ではなく、むしろ生活の教育化」が必要であると主張する。それは、「生活を主体として、その中へ教育を織り込むといえますか、はさむといえますかそういうところまでいきたいのがあります」と述べる。それは、幼児の日常生活の中から教育が始まるのであり、子どもの自然的な行動の中に教育が求められるのであるとする。彼は、「真の保育法としては、その子がどの位まで求めているかということから始めなければならない」のであり、先生は子どもの行動に対して、「いろいろ先生」や「ジリジリ先生」といった自己本位の教え込みの態度は、取るべきではないとする。それが「保育法のだいじなコツ」なのである。倉橋の考え方は、現在の幼児

教育に生かされている。

「全国保育士会倫理綱領」（2003年）では、「すべての子どもは、豊かな愛情のなかで心身ともに健やかに育てられ、自ら伸びていく無限の可能性を持っています」と述べられている。また、保育者の役割を「私たちは、子どもが現在（いま）を幸せに生活し、未来（あす）を生きる力を育てる保育の仕事に誇りと責任をもって、自らの人間性と専門性の向上に努め、一人ひとりの子どもを心から尊重」する必要があるとする。また、平成17年の中央教育審議会の答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」において、「幼児は、遊びの中で主体的に対象にかわり、自己を表出する。そこから、外の世界に対する好奇心が育（はぐく）まれ、探索し、知識を蓄えるための基礎が形成される。また、ものや人とのかかわりにおける自己表出を通して、幼児の発達にとって最も重要な自我が芽生えるとともに、人とかかわる力や他人の存在に気付くなど、自己を取り巻く社会への感覚を養っている」とする。

本稿では、子どもの健康をどのように生かした保育がなされるべきかを論じる。（1）保育者の資質とは何かを取り上げ、次に（2）幼稚園教育要領と保育所保育指針の中での保育内容「健康」とは何かを論じ、最後に（3）幼児教

育・保育と保育者の具体的な実践として、食育の事例を取り扱うことにより、真の保育者の役割とは何かを求める。

第1章 保育者の役割と資質

(1) 保育者の役割

「幼稚園教育要領」によれば、「幼稚園における人的環境が果たす役割は極めて大きい。幼稚園の中の人的環境とは、担任の教師だけでなく、周りの教師や友達すべてを指し、それぞれが重要な環境となる。特に、幼稚園教育が環境を通して行う教育であるという点において、教師の担う役割は大きい」。一人ひとりの幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主体的な活動を直接援助すると同時に、教師自らも幼児にとって重要な環境の一つであることをまず念頭におく必要がある。

さらに「幼稚園は、多数の同年代の幼児が集団生活を営む場であり、幼児一人一人が集団生活の中で主体的に活動に取り組むことができるよう、教師全員が協力して指導にあた」らなければならないのである。教師の役割の一般的な留意事項としては一番目に①幼児の主体的な活動と教師の役割が挙げられる。幼稚園教育においては、幼児の主体的活動としての遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切である。教師が遊びにどう関わるのか、教師の役割の基本を理解することが必要であり、そのために教師には、幼児の主体的な遊びを生み出すために必要な教育環境を整えることが求められる。さらに、教師には、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を作り出していくことも求められている。そのための教師の役割は、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割とがある。また、幼児と適切な関わりをするためには、幼児一人ひとりの特性を的確に把握し、理解することが基本となる。

二番目として②集団生活と教師の役割が考えられる。幼児の主体的な活動は、友達との関わりを通してより充実し、豊かなものとなる。そこで、一人ひとりの思いや活動をつなぐよう環境を構成し、集団の中で個人のよさが生かされるように、幼児同士が関わり合うことのできる環境を構成していくことが必要である。幼児期は自我が芽生える時期であり、友達との間で物をめぐる対立や思いの相違による葛藤が起こりやすい。幼児は、それらの経験を通して、相手の気持ちに気付いたり自分の思いを相手に分かってもらうために伝えることの大切さを学んだりしていく。また、自分の感情を抑え、相手のことを思いやる気持ちも学んでいく。この意味で、友達との葛藤が起こることは、幼児の発達にとって大切な学びの機会であるといえる。ここで教師は、幼児一人ひとりの発達に応じて、相手がどのような気持ちなのか、あるいは自分がどのようにすればよいのかを体験を通して考えたり、人として絶対にしてはならないことや言ってはならないことがあることに気付いたりするように援助することが大切である。また、集団の生活にはきまりがあることに気づき、そのきまりをなぜ守らなければならないかを体験を通して考える機会を与えていくことが重要である。

例えば、集団に入らずに一人でいる幼児については、その幼児の日々の様子をよく見て、心の動きを理解することが大切である。何かに興味をそそられ、一人での活動に没頭して加わっていないのか、教師から離れるのが不安で参加していないのか、集団に入ろうとしながらも入れないでいるのかなど、状況を判断し、適切な関わりをその時々にしていくことが必要である。また、一見集団で遊んでいるように見えても、主体的に取り組んでいない幼児がいることから、皆で楽しく遊べないこともある。このような時には、目的をもって充実した活動が展

開できるように環境を再構成し、援助していくことが必要なのである。幼児は、様々な友達との関わりの中で多様な経験をし、よさを相互に認め合い、友達とは違う自分のよさに気づき、自己を形成していく。集団で一つのものを作ったり、それぞれが役割を分担して一つのことを成し遂げたりすることを通して、仲間意識がさらに深まる。皆で協力し合うことの楽しさや責任感、達成感を感じるようになり、友達にも分かるようきちんと自分の思いを主張したり、時には自分のやりたいことを我慢して譲ったりすることを学んでいく。

三番目に③教師間の協力体制が挙げられる。幼児一人ひとりを育てていくためには、教師が協力して一人ひとりの実態をとらえていくことが大切である。幼児の興味や関心は多様であるため、様々な活動をしている幼児を同時に見ていかなければならない。そのためには、教師同士が日ごろから協力することが大切である。連絡を密にすることのよさは、教師が相互に様々な幼児にかかわり、互いの見方を話し合うことで、幼児理解を深められることである。また教師が一人では気付かなかったことや自分とは違う見方、考え方に触れながら、幼稚園の教職員全員で一人ひとりの幼児を育てるという視点に立つことが重要である。

また「保育所保育指針」によれば保育士の役割は、「保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」と述べられている。このような視点から、保育士には幼稚園教師と同じような役割が求められる。①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏ま

え、子ども自らが生活していく力を助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術などの6点があげられる。幼稚園教師と同様、一人ひとりの子どもを注意深く見つめ、発達段階に応じて各自の可能性を日常生活の中で見出し、それを援助することが求められる。

(2) 保育者のさまざまな資質

幼稚園教師と保育士にとって次の4点を積み重ねることが求められる。(1) 注意深い幼児理解。保育はまず、自己の眼前の幼児についての深い理解が求められる。保育者は幼児の姿の深奥に何があるのかを見つけ幼児理解を深めることが求められる。表面的な像だけではなく、幼児の心を深く読み取る必要がある。目に見える事柄だけで幼児理解ができていては思わないために、絶えず幼児と過ごし、心に触れた理解が必要である。(2) 幼児との信頼関係。日常生活の中から信頼関係が生まれてくる。保育者が努力して援助することによって、生まれてくる。そして幼児一人ひとりとの信頼関係が成立していくということは、その後ろにいる保護者と保育者と信頼関係を作る基にあり、それは好ましい保育を行う基礎となる。(3) 幼児の発達の過程を見通しての保育。保育者は子どもたちの発達に沿った計画性のある保育が求められる。「教師が、それぞれの発達の時期にどのような経験が必要かなどを長期的に見通して、指導の内容や方法を予想して指導計画を立てることが必要である」。遊びの意味や価値を幼児の

発達と結びつけて深め、保育の内容として成立させていくということが、保育者の役割である。(4) 実際の保育の中での適切な役割。「教師は、理解者、共同作業など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」が実践者としての保育者の役割である。一人ひとりについての理解が求められ、どのような援助が必要かを認識する必要がある。保育者は常に自己の役割を認識し、より高い倫理観を持つことが必要である。

『幼稚園教員の資質向上について』(幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書)において、「幼稚園教員は、幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で発達に必要な経験を幼児自らが獲得していくことができるように環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要である」(3 幼稚園教員に求められる専門性(1) 幼稚園教員としての資質)とされている。また「3 幼稚園教員に求められる専門性(2) 幼児理解・総合的に指導する力」では「幼児の発達段階や発達過程を、その内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感をもって受け入れる、といった幼児理解が、基本として重要である。そして、幼児の総合的な発達を促すため、主体性を引き出しつつ、遊びを通じて総合的に指導する力が、専門性として求められており、幼児期の特性に応じて指導する力として重要である」とも述べられている。保育者が是非とも留意しなければならないのは次の6点である。①幼児との距離、近くからや遠くからなど、幼児をみる複眼的な視線を重要視する。②幅広い視線で幼児の内面を観察する。③観察記録を重視し、一つ一つの出来事背景や理由を考える。④これまでの自分の保育活動を自己反省し、これから活動するための糧とする。⑤同僚の保育者の活動を見た

り観察記録を熟読することで、自分の保育活動に活かす。⑥保育者としての感性を豊かにする。

以上述べてきたように、保育者の専門性は「幼児を理解し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要であり、さらに、家庭との連携を十分に図りつつ教育を展開する力なども求められている。具体的には、幼児を内面から理解し、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携を推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、園長など管理職が発揮するリーダーシップ、人権に対する理解などが、教員に求められる専門性として挙げられる」(「幼稚園教員の資質向上について-自ら学ぶ幼稚園教員のために」幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書(平成14年6月24日) I 幼稚園を取り巻く環境の変化と幼稚園教員に求められる専門性 3 幼稚園教員に求められる専門性)。

保育は、保育者の一方的な子どもたちへの働きかけだけで終わるものではない。それは、相手の気持ちを理解し、かつ自己も変容する保育者にとっての学習でもある。近年、発達の個人差や、国籍や文化の違いなど一人ひとりの個性について正しい理解に基づく保育が重視されている。ここではお互いの違いを大切にしよう姿勢が重要である。

第2章 保育者が保育内容「健康」の領域をいかに教えるのか

第1節 幼稚園教育要領(平成20年改訂)

(1) 改訂の経緯

平成17年2月に、文部科学大臣から21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため、教員の資質・能力の向上や教育条件の整備など

と併せて、国の教育課程の基準全体の見直しについて検討するよう、中央教育審議会に対して要請し、同年4月から審議が開始された。この間、教育基本法と学校教育法の改正が行われ、中央教育審議会はこれらを踏まえた審議を行った結果、平成20年1月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申を行った。

この答申を踏まえて、平成20年3月28日に学校教育法施行規則を改正するとともに、「幼稚園教育要領」・「小学校学習指導要領」・「中学校学習指導要領」を公示した。

中央教育審議会答申では、各学校段階にわたる学習指導要領などの改善の方向性として、次の7点を示している。

1. 改正教育基本法等を踏まえた改訂
2. 「生きる力」という理念の共有
3. 基礎的・基本的な知識・技能の習得
4. 思考力・判断力・表現力等の育成
5. 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
6. 学習意欲の向上や学習習慣の確立
7. 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

また、「幼稚園教育要領」については、次のような事項を改善の基本方針として示した。

1. 幼稚園教育については、近年の子どもたちの育ちの変化や社会の変化に対応し、発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭での生活の連続性を確保し、計画的に環境を構成することを通じて、幼児の健やかな成長を促す。
2. 子育ての支援と教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動については、その活動の内容や意義を明確化し、幼稚園における教育活動として適切な活動となるようにする。

(2) 改訂の要点

領域「健康」

- ① 次のことなどを新たに「内容」に示している。
 - ・ 先生や友達と食べることを楽しむこと
- ② 次のことなどを新たに「内容の取り扱い」に示されている。
 - ・ 十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること
 - ・ 幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心を持ったりするなど、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること
 - ・ 基本的な生活習慣の形成に当たって家庭での生活経験に配慮すること

(3) 心身の健康に関する領域「健康」

—健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う—

(a) ねらい

- ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう
- ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする
- ③ 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身につける

生涯を通じて、健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に愛情に支えられた環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することによって培われていくものである。健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つことを目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである。

幼稚園においては、一人ひとりの幼児が教師

や他の幼児などとの温かい触れ合いの中で楽しい生活を展開することや自己を十分に発揮して伸び伸びと行動することを通して充実感や満足感を味わうことが大切である。明るく伸び伸びということは、単に行動や言葉などの表面的な活発さを意味するものだけではなく、幼稚園生活の中で解放感を感じつつ、積極的に周りのものと関わり、自己を表出しながら生きる喜びを味わうという内面の充実をも意味するものであり、自己充実に深く関わるものである。

このような健康な心は、自ら体を十分に動かそうとする意欲や進んで運動しようとする態度を育てるなど、身体諸機能の調和的な発達を促す上でも重要なことである。特に幼児期においては、自分の体を十分に動かし、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて進んで体を動かそうとする意欲などを育てることが大切である。

同時に自分の体を大切にし、身の回りを清潔で安全なものにするなどの生活に必要な習慣や態度を、幼稚園生活の自然な流れの中で身に付けていくようにすることも重要なことである。

(b) 内容

- ①先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- ②いろいろな遊びの中で十分に体を動かす
- ③進んで戸外で遊ぶ
- ④様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む
- ⑤先生や友達と食べることを楽しむ
- ⑥健康な生活のリズムを身に付ける
- ⑦身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄はいせつなどの生活に必要な活動を自分でする
- ⑧幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って行動する
- ⑨自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う
- ⑩危険な場所、危険な遊び方、災害時などの

行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する

(4) 先生や友達と食べることを楽しむことのねらい

本来、食べることは、人が生きていくために必要なことである。幼児期に十分に体を動かして遊び、空腹感を感じ、食べ物を食べる時に満足感を心と体で味わう。さらに、気持ちが安定し、活力がつくと、積極的に様々な活動をするようになる。このような体験を繰り返すことは、幼児が食べることの楽しさや喜びに気づき、幼児らしい充実した生活を作り出す上で重要である。

幼児は、まず家族と同じ場で一緒に食事をし、幼稚園に入って家族以外の人と一緒に食べることを経験する。初めは、家族と幼稚園での食事風景が異なることから、幼児が戸惑うことが考えられる。しかし、自分に温かく接してくれる教師と一緒に食べることで、幼児はくつろぎ安心して食べるようになっていく。その中で、時には教師や友達と会話を交わしたりしながら、一緒に食べるのが楽しめるようになっていく。また、教師や友達との関わりが深まるにつれて、食べる時も一緒に食べたいと思うようになり、一層食べることを楽しむようになっていく。

幼児は、食事の時間以外でも空腹になると食べ物を食べることもあるが、幼稚園生活では幼児の好きな時に食べることが出来るわけではない。入園当初では、幼稚園に弁当を持って来ていると、幼児は楽しみで待ち切れないこともある。教師は、幼児の食べたいという気持ちを受け止め、幼児の心に寄り添いながら、同じ気持ちを持つ友達と一緒に昼食の時間を楽しみにする気持ちを共有することが大切である。そのことが教師や友達と一緒に食べた時の喜びに繋がっていき、このような教師や友達との気持ちのやり取りの体験を重ねる中で、幼児は教師や

友達と一緒に食べることに期待を持つようになっていく。

(5) 食育の必要性

食べることは、健康な心と体に欠くことの出来ないものであり、生涯にわたって健康な生活を送るためには望ましい食習慣の形成が欠かせない。幼児期には、食べる喜びや楽しさ、食べ物への興味や関心を通じて、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにすることが大切である。

教師や友達と食べるとより一層楽しくなることを感じるためには、和やかな雰囲気作りをすることが大切である。例えば、幼稚園では遊びと同じ場で食事を取り、同じ机を使うことが多い。机を食卓らしくすることや、幼児が楽しく食べられるような雰囲気作りをすることなど、落ち着いた環境を整えて、食事の場面が和やかになるようにすることが大切である。また、幼稚園では昼食の他に誕生日のお祝いや季節の行事にふさわしい食べ物を食べることもある。幼稚園生活での様々な機会を通して、幼児がみんなで食べるとおいしいという体験を積み重ねていけるようにすることが大切である。

また、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにするためには、食べ物への興味や関心を高める活動も重要である。例えば、野菜などを育てる中で親しみを感じ、日頃口にしようとしなくてもおいしそうだと感じたりする。教師と共に簡単な料理をすることや、教師の手伝いをするによって、その食べ物を食べたいと思うこともある。もしくは、農家などの地域の人々との交流によって食べ物への関心が高まることもある。このように、幼児の身近な所に食べ物があることによって、幼児は食べ物に親しみを感じ、興味や関心を持ち、食べてみたい物が増え、進んで食べようとする気持ちが育つ。さらに、地域や保護者の協力を得ながら食

べる体験を通じて、幼児が食べ物を大切にする気持ちや、用意してくれる人々への感謝の気持ちが自然に芽生えていくことに繋がる。

そして特に、食生活はまず家庭で育まれることから家庭との連携も重要になる。特に、食物アレルギーなどを持つ幼児に対しては、家庭との連携を図り、必要な情報を得るなど十分な配慮をする必要がある。

第2節 「保育所保育指針」(平成20年改訂)

(1) 改訂の背景

旧保育指針の施行から8年が経過し、この間に子どもや子育てで家庭を取り巻く状況は、保育関係者の努力により改善されてきた面もあるが、依然として課題や問題点も存在する。家庭や地域において、人や自然と関わる経験が少なくなり、子どもにふさわしい生活時間や生活リズムが作れないことなど、子どもの生活が変化する一方で、不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下や児童虐待の増加などが指摘されている。

また、①地域における子育て支援の活動が活発になる中で、保育者だけではなく多様な支援の担い手といった地域の保育・子育て支援の資源が蓄積されつつあること、②延長保育や一時保育などの保護者の多様なニーズに応じた保育サービスの普及が進むとともに、保育所職員と保護者との適切な関わりが求められていること、③平成18年に保育所と幼稚園の機能を一体化した「認定子ども園」制度が創設されたこと、④同じ平成18年に改正された教育基本法において幼児期の教育の振興が盛り込まれ、就学前の教育の充実が課題になっていること、⑤仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)の実現が求められる中で、働きながら子育てをしている家庭を支える地域の担い手として、保育所に対する期待が高まっていること、など保育所をめぐる環境も様々に変化している。

乳幼児期は、子どもが生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期であり、少子化が進み家庭や地域の子育て力の低下が指摘される中で、保育所における質の高い養護と教育の機能が強く求められている。また、子どもの育ちや保護者をめぐる環境が変化し、保育所への期待が高まり、質の高い保育が求められる中で、保育所の役割・機能を再確認し、保育の内容の改善・充実を図ることが重要になっている。

このような観点から保育指針の内容や構成を見直し、更なる保育の質の向上を目指すことになった。

(2) 改訂の要点

保育所の役割は、保育指針の中で位置づけられている。すなわち、保育所は養護と教育を一体的に行うことを特性とし、環境を通して子どもの保育を総合的に実施する役割を担うとともに、保護者に対する支援（「入所する児童の保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援」）を行うことを明記している。その上で、保育所における保育の中核的な担い手である保育士の業務とともに、保育所の社会的責任（子どもの人権の尊重、説明責任の発揮、個人情報保護など）について規定している。

このような基本的な考え方にに基づき、改訂の内容は次の4点に整理できる。

①発達過程の把握による子どもの理解、保育の実施

誕生から就学までの長期的視野を持って子どもを理解するため、第2章「子どもの発達」において発達過程区分に沿った子どもの発達の道筋を明記し、第3章「保育の内容」において乳幼児期に育ち経験することが望まれる基本的事項を示すとともに、乳児、3歳未満児、3歳以上児など発達過程に応じた特有の配慮事項を示している。

②「養護と教育の一体的な実施」という保育所

保育の特性の明確化

養護と教育が一体的に展開される保育所の生活において、保育の内容をより具体的に把握し、計画—実践—自己評価するための視点として「ねらい及び内容」を「養護」と「教育」の両面から示している。

③健康・安全のための体制充実

子どもの健康・安全の確保が子どもの保育所での生活の基本であるとの考えの下に、子どもの発育・発達状態の把握、健康増進、感染症など疾病への対応、衛生管理、安全管理などの諸点に関し、保育所が施設長の責任の下に取り組むべき事項を明記している。加えて、不適切な養育に関する早期把握、要保護児童対策地域協議会（子どもを守る地域ネットワーク）など地域の専門機関との連携にも言及している。

また、食育基本法の制定などを踏まえ、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、食育の推進を明記している。さらに、健康・安全、食育に関する計画的な実施のため、全職員の連携・協力、専門的職員の確保など保育の実施体制を規定している。

④小学校との連携

子どもの生活や発達の連続性を踏まえた保育の内容の工夫、小学校の子どもや職員間の交流など積極的な連携に取り組むことを奨励するとともに、就学に際し子どもの育ちを支えるための資料を「保育所児童保育要録」として小学校へ送付することを義務づけている。

第3章 保育内容「健康」の実践 —幼児期における食育—

世界保健機関前文に、「児童の健康的な発育は根本的な重要性をもつ。このような発育には、絶えず変化をつづけるあらゆる環境の中で、調和をとりながら生活をする能力が不可欠となる」と述べられ、子どもの発育には、彼らを取り巻く環境が必要であり、さらに子どもの健康に関

して、「政府は国民の健康に対して責任を負うものであるが、その責任は、適切な保険的および社会的方策を供与することによってのみ果たすことができる」とし、そのために政府が大きな役割を果たさねばならないとしている。そのために平成17年6月に「食育基本法」が公布され、平成18年3月に「食育推進計画」が決定され、さらに平成23年3月に「第2次食育推進基本計画」が出された。

(1) 食育の推進

子どもが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくために、「食」はとても重要である。乳幼児期における望ましい食習慣の定着、食を通じた人間性の形成、家族関係作りによる心身の健全育成を図るため、保育所では食に関する取り組みを積極的に進めていくことが求められている。

「食育基本法」(平成17年法律第63号)は、「保育所における食育に関する指針」(平成16年3月29日雇児発第03290015号)を参考に、保育の内容の一環として食育を位置づけている。そして、施設長の責任の下で、保育士、調理員、栄養士、看護師などの全職員が協力し、各保育所の創意工夫で食育を推進していくことが求められている。

また、子どもの保護者についても食への理解が深まり、食事を作ることや子どもと一緒に食べることに喜びが持てるように、調理室などの環境を活用し、食生活に関する相談・助言や体験の機会を作ることが求められている。

「保育所における食育に関する指針」では、食と子どもの発達の観点から食育の5項目を以下のように設けている。

- ①「食と健康」：健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う
- ②「食と人間関係」：食を通じて、他の人々と親しみ支え合うために、自立心を育て、

人と関わる力を養う

- ③「食と文化」：食を通じて、人々が築き継承してきた様々な文化を理解し、作り出す力を養う
- ④「いのちの育ちと食」：食を通じて、自らも含めた全ての命を大切に作る力を養う
- ⑤「料理と食」：食を通じて、素材に目を向け、素材に関わり、素材を調理することに関心を持つ力を養う

(a) 食育の基本

①食育の目標

保育所における食育は、「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うために毎日の生活と遊びの中で、食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、大人や仲間と楽しみ合う子どもに成長していくことが期待されている。なお食育の実施に当たって、家庭や地域社会との連携を図り、進めることが求められる。

②食育の内容

「保育所における食育に関する指針」が示す食育の5項目を参考に、保育の内容に食育の視点を盛り込むよう努めることが必要である。食に関する体験がこれらの項目の間で相互に関連を持ちながら、総合的に展開することが出来るように援助する。

(b) 食育の詳細

①計画の作成と評価

「食育の計画」の作成に当たっては、平成19年11月に取りまとめられた「保育所における食育の計画づくりガイド」を参考に次の点に留意し、子どもが主体的に食育の取り組みに参画できるように計画する。

- 保育所における全体的な計画である「保育課程」と具体的な計画として作成される「指導計画」の中に位置づけられる

- 保育所での食事の提供は、食育の一部であることから、食事の提供を含む食育の計画とする
- 作成に当たっては、柔軟で発展的なものとなるように留意し、各年齢を通して一貫性のあるものにします
- 食育の計画を踏まえて、実践が適切に進められているかどうかを把握し、その経過や結果を記録し評価することによって、改善するように努める
- 食事内容を含めて、食育の取り組みを保護者や地域に向けて発信し、食育の計画・実施を評価し、次の計画へと繋げる

②食の提供の留意点

日々の食事提供に当たっては、子どもの状態に応じて摂取法や摂取量などを考慮する。特に、以下の点に留意し、子どもが食べることを楽しむことが出来るように計画する。

- 入所前の生育歴や入所後の記録などから、子どもの発育・発達状態・健康状態・栄養状態・生活状況などを把握し、それぞれに応じた必要な栄養量が確保できるように留意する。また、子どもの咀嚼や嚥下機能等の発達に応じて食品の種類・量・大きさ・固さ・食具等を配慮し、食に関わる体験が広がるように工夫する。
- 授乳・離乳期においては、食べる意欲の基礎を作ることが出来るように家庭での生活を考慮し、一人ひとりの子どもの状況に応じて時間・調理方法・量などを決める。母乳育児を希望する保護者のために、衛生面を配慮し、冷凍母乳による栄養法などで対応する。
- 安全で安心できる食事を提供するために、食材料の選定・保管時・調理後の温度管理の徹底など衛生面に配慮する。
- 地域の様々な食文化等に関心を持つことが

出来るように食事内容や行事等の内容にも配慮する。

- 子どもの食事状況の実態などを随時把握し、計画・実践過程を全職員で評価し、給食が子どもにとって美味しく魅力的なものであるように食事の質の改善に努める。

(c) 食育のための環境

保育所では、次の事項に留意して、人的・物的な環境の計画的な構成が望まれる。

- 自然の恵みとしての食材料や、それを育て、調理し、食事を整えてくれた人への感謝の気持ち、命を大切にする気持ちなどを育むこと。また、子どもの活動のバランスに配慮し、食欲を育むことが出来るようにすると共に、食と命の関わりなどを実感し、体験することの出来る環境を構成する
- 情緒の安定のために、ゆとりある食事の時間を確保し、食事する部屋が温かな親しみとくつろぎの場となるように、採光、テーブル・椅子・食器・食具、調理室などの環境に配慮する
- 子ども同士、保育士・栄養士・調理員だけではなく、保護者や地域の人々とも一緒に食べ、食事を作る中で、子どもの人と関わる力が育まれるように環境を整える

(d) 様々なニーズを持つ子どもへの対応

基本的に全職員が連携・協力して食育の推進に当たるのだが、栄養士が配置されている場合には、子どもの健康状態、発育・発達状態、栄養状態、食生活の状況を見ながら、その専門性を生かして献立の作成、食材料の選定、調理方法、摂取の方法、摂取量の指導に当たることが望まれる。また、必要に応じて療育機関・医療機関等の専門職の指導・指示を受けることが必要である。

①体調不良の子どもへの対応

病気の始まりの状態、病気の回復期等病気や

一人ひとりの心身の所見に応じた食事の提供は、病気の悪化を防ぐことや病気の回復を早めること等の目的がある。必要に応じて嘱託医やかかりつけ医の指導・指示により食事を提供することが必要である。

②食物アレルギーのある子どもへの対応

食べ物によって種々のアレルギー症状を呈する子どもの食事、特に除去食については専門医

やかかりつけ医などの指導・指示が必要である。保護者の申し入れが子どもの健康や発育・発達に支障をもたらすことも考えられる。除去食等が提供される場合には、除去食品の誤食などの事故防止に努め、当該の子どもだけではなく他の子どもや保護者にもその旨を理解してもらうことが必要である。

表1 食育推進計画の概要（平成18年度から22年度までの5年間）

第1 食育の推進に関する施策についての基本的な方針

1. 国民の心身の健康の増進と豊かな人間形成
2. 食に関する感謝の念と理解
3. 食育推進運動の展開
4. 子どもの食育における保護者、教育関係者等の役割
5. 食に関する体験活動と食育推進活動の実践
6. 伝統的な食文化、環境と調和した生産等への配慮及び農山漁村の活性化と食料自給率の向上への貢献
7. 食品の安全性の確保等における食育の役割

第2 食育の推進の目標に関する事項

1. 食育に関心を持っている国民の割合（70%→90%）
2. 朝食を欠食する国民の割合（子ども4%→0%、20代男性30%→15%、その他）
3. 学校給食における地場産物を使用する割合（21%→30%）
4. 「食事バランスガイド」等を参考に食生活を送っている国民の割合（60%）
5. 内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）を認知している国民の割合（80%）
6. 食育の推進に関わるボランティアの数（20%増）
7. 教育ファームの取組がなされている市町村の割合（42%→60%）
8. 食品の安全性に関する基礎的な知識を持っている国民の割合（60%）
9. 推進計画を作成・実施している自治体の割合（都道府県100%、市町村50%）

第3 食育の総合的な促進に関する事項

1. 家庭における食育の推進
2. 学校、保育所等における食育の推進
3. 地域における食生活の改善のための取組の推進
4. 食育推進運動の展開（食育月間（毎年6月）、食育の日（毎月19日））
5. 生産者と消費者との交流の促進、環境と調和のとれた農林漁業の活性化等
6. 食文化の継承のための活動への支援等
7. 食品の安全性、栄養その他の食生活に関する調査、研究、情報の提供及び国際交流の推進

第4 食育の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進するために必要な事項

- 都道府県等による推進計画の策定促進、基本計画の見直し等

表2 「厚生労働省 保育所における食育に関する指針 3歳児以上の給食」

ねらい	内 容	配慮事項
「食と健康」 ①できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう。 ②自分の体に必要な食品の種類や働きに気づき、栄養バランスを考慮した食事をとろうとする。 ③健康、安全など食生活に必要な基本的な習慣や態度を身につける。	①好きな食べものをおいしく食べる。 ②様々な食べものを進んで食べる。 ③慣れない食べものや嫌いな食べものにも挑戦する。 ④自分の健康に関心を持ち、必要な食品を進んでとろうとする。 ⑤健康と食べものの関係について関心を持つ。 ⑥健康な生活リズムを身につける。 ⑦うがい、手洗いなど、身の回りを清潔にし、食生活に必要な活動を自分でする。 ⑧保育所生活における食事の仕方を知り、自分たちで場を整える。 ⑨食事の際には、安全に気をつけて行動する。	①食事と心身の健康とが、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子どもが保育士や他の子どもとの暖かな触れ合いの中で楽しい食事をすることが、しなやかな心と体の発達を促すよう配慮すること。 ②食欲が調理法の工夫だけでなく、生活全体の充実によって増進されることを踏まえ、食事はもちろんのこと、子どもが遊びや睡眠、排泄などの諸活動をバランスよく展開し、食欲を育むよう配慮すること。 ③健康と食べものの関係について関心を促すに当たっては、子どもの興味・関心を踏まえ、全職員が連携のもと、子どもの発達に応じた内容に配慮すること。 ④食習慣の形成に当たっては、子どもの自立心を育て、子どもが他の子どもとかわりながら、主体的な活動を展開する中で、食生活に必要な習慣を身につけるように配慮すること。

③障害のある子ども

障害のある子どもに対し、他の子どもと異なる食事を提供する場合があり、食事の摂取に際しても介助が必要な場合がある。療育機関・医療機関等の専門職の指導・指示を受けて、一人ひとりの子どもの心身の状態、特に咀嚼や嚥下^{そしやく えんか}の摂食機能や手指の運動機能の状態に応じた配慮が必要である。また、誤食を始めとする事故の防止にも留意しなければならない。さらに、他の子どもや保護者が障害のある子どもの食生活について理解できるように配慮する。

④食を通した保護者への支援

家庭と連携・協力して食育を進めていくことが大切である。保育所での子どもの食事の様子や、保育所が食育に関してどのように取り組んでいるのかを伝えることは、家庭での食育の関心を高めていくことに繋がる。また、家庭からの食生活に関する相談に応じ、助言・支援を行う。

具体的取り組みとしては、毎日の送迎時での助言、家庭への通信、日々の連絡帳、給食やおやつを含めた保育参観や試食会、保護者の参加による調理実践、行事などが考えられる。懇談会などを通して、保護者同士の交流を図ることにより、家庭での食育の実践がより広がることも期待出来る。

地域の子育て家庭において、子どもの食生活に関する悩みが子育て不安の一因となることもある。その場合、食を通して、子どもへの理解を深め、子育ての不安を軽減し、家庭や地域の養育力の向上に繋げることが出来るように保育所の調理室を活用し、食生活に関する相談・支援を行うことが必要である。

これらの食育の方針をまとめたのが表1の「食育推進計画の概要」である。

(2) 食事指導

子どもの食事は、身体の栄養だけではなく、

子どもの心をも育てている。つまり、子どもがさまざまな食べ物に出会いながら楽しい食事することで、健全な身体と精神の発達を促し、豊かな人間性を培うのである。3歳以上になると経験や学習を通して、生活の中のさまざまな事柄に自分から挑戦していくようになる。健康で安全な生活を送るため、うがいや食事の前の手洗いなどの衛生管理や、食器の扱いや配膳などできるようになる。3歳以上になると、自ら食べる量を選択する、給食当番としてテーブルをふく等が求められる。幼児は役割分担を行うことにより、さまざまな活動に参加していくことができるのである。表2は3歳児以上の給食の活動をまとめたものである。栄養バランス、衛生、幼児の自立心の涵養等、食と健康および身体的、精神的発達がバランスよく示されている。

表2から、保育所の生活の中で幼児の衛生管理を整え、健康に留意しながら食を通して、健全な、調和の取れた身体的・精神的発育を目指していることが窺える。

おわりに

秋田喜代美は、保育者には、技術的省察、実践的省察、批判的省察の3つが必要であるという。秋田によれば、保育者と幼児の関係、幼児同士の関係が「いかにうまくいったか、うまくいかなかったかを考える」技術的省察という現象的なものからはじまり、「子どもたち同士、保育者にとって、遊びや活動はどのような意味があったのか」という実践的省察という分析、さらになぜ今の活動、その方法なのかという「なぜ」を考える批判的省察、それらは、日々の保育活動の深まりを通してより質の高い保育者へと向上することを求めている。

小田豊は、幼稚園、保育園での教育は、「遊びの生活化」であり、子どもにとっては「自由

感に溢れた教育的意図」のつまった保育内容でなければならないとする。小田は(1)子ども中心保育、(2)放任的な保育、(3)教科学習的保育、(4)オープン保育の4つのカテゴリーに分類する。小田は4つのカテゴリーのどれが優れているかを判断することはできないが、子どもたち一人ひとりの状況に合致させる必要があるとする。筆者にとって、放任的な保育はあまりに無責任すぎる。教科学習的保育は、幼少期からの詰め込みの要素がある。オープン保育は、子どもに遊びを選択させるという一見子ども中心保育に近いように見えるが、遊びが手段化するおそれがある。子ども中心の保育は、子どもの興味・関心を生かすことはもちろん、保育者自身の願い・意図も反映させたものとなる必要がある。食育の場合、保育者は栄養バランスを考えることが必要であるが、子どもの好き嫌いや、個人差を考え、一人ひとりに合った食の指導が求められるのである。

【注】

- (1) 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館、2010年、31頁。
- (2) 同上書、39頁。
- (3) 秋田喜代美「保育者の専門的成長」、小田豊、榎沢良彦編『新しい時代の幼児教育』有斐閣アルマ、2008年、183頁。
- (4) 小田豊「保育内容の構造と展開」、小田豊、榎沢良彦編『新しい時代の幼児教育』有斐閣アルマ、2008年、205-206頁。

【参考文献】

1. 小田豊、榎沢良彦編『新しい時代の幼児教育』有斐閣アルマ、2008年
2. 「現代と保育」編集部編『食事で気になる子の指導』ひとなる書房、2008年
3. 河錫濤編『保育内容・健康』同文書院、2010年
4. 松本峰雄・御園愛子監修『よくわかる指導計画の書き方』ユーキャン学び出版、2011年
5. 平成23年版『食育白書』内閣府
6. 保育士養成講座編集委員会編『子どもの食と栄

- 養』全国社会福祉協議会、2011 年
7. 幼稚園教育要領解説 (平成 20 年 10 月) 文部科学省
 8. 笠原賀子編『栄養教諭のための学校栄養教育論』医歯薬出版、2009 年
 9. 小田豊、森真理編『教育原理』北大路書房、2011 年
 10. 生田貞子他編『保育の原理』福村出版、2010 年
 11. 小田豊、青井倫子編『幼児教育の方法』北大路書房、2010 年
 12. 厚生労働省編『保育所保育指針解説書』2010 年
 13. 小田豊他編『保育者論』北大路書房、2011 年
 14. 吉田淳、横井一之編『保育実践を支える環境』福村出版、2000 年
 15. 小川博久『保育援助論』萌文書林、2010 年
 16. 大沢裕・高橋弥生編『保育者論』一藝者、2011 年
 17. 無藤隆『保育の学校』フレーベル館、2011 年
 18. 秋田喜代美他編『保育内容「環境」』みらい、2009 年
 19. 文部科学省『幼稚園における道德性の芽生えを培うための事例集』平成 13 年 3 月
 20. 大豆生田終友、三谷大紀編『最新保育資料集』ミネルヴァ書房、2011 年
 21. 倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館、2010 年